

象徴としての天皇

——明治憲法下での議論

瀧井一博

1 象徴としての天皇——日本国憲法第1条

現行の日本国憲法は、その第1条で次のように規定している。

天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。

天皇が象徴であるとは何を意味するのか。憲法がその国家の象徴について規定することは例のないことではなく、¹ そのような象徴の機能を君主に委ねている例もある。² 日本国憲法の場合、この天皇の象徴性は、第二次世界大戦前の体制との決別の意味を込めて理解されている。代表的な憲法学者の述べるところを引いておこう。

憲法が天皇に象徴的役割を求めた背景には、天皇が明治憲法下の天皇とは違って政治行動の外にあって超然とした中立的存在であることを求めるという狙いがあり、国民主権に立っての、わが国の従前の歴史についての省察に基づく決断がある。³

このように、日本国憲法第1条の規定は、大日本帝国憲法（以下、明治憲法）の天皇のあり方に対するアンチテーゼとして定められた。明治憲法は、その第1条で「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と定め、さらに第4条では「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」と規定し、天皇の絶対的な主権者性を宣揚している。

日本国憲法の天皇規定は、それを否定するために終戦直後、アメリカ占領軍によって提示された。最高司令官ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur, 1880-1964）が作成した日本国憲法の原案（マッカーサー草案）に天皇を象徴とする規定を認めた日本側責任者は、「憲法に文学書のような言葉が出て来る」と驚愕した。

1 ドイツのボン基本法第22条「連邦国旗は、黒・赤・金である」。

2 1978年のスペイン憲法第56条「国王は……国の統一および永続性の象徴である」。

3 佐藤幸治『日本国憲法論』成文堂、2011年、507頁。

4 Article I. The Emperor shall be the symbol of the State and of the Unity of the People, deriving his position from the sovereign will of the People, and from no other source.

2 万世一系の天皇——大日本帝国憲法（明治憲法）第1条

マッカーサー草案を突きつけられた日本側起草者は、「象徴」という言葉は文学的表現だと感じた。法律用語として違和感をもったのである。今日でも、日本国憲法に言う「象徴」とは法的な意味を有するものというよりも、社会心理的作用を期待してのシンボリックな概念としばしば説明される。その意味で、それは“文学”的なものである。

ここで目を日本国憲法によって否定された明治憲法に転じよう。既述のようにその第1条は、「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と定めていた。ここで次のように考えてみる価値がないだろうか。「象徴」が文学的表現ならば、「万世一系」というのも、同じく文学的ではないか、と。じじつ、そのように感じて違和感を表明した専門家が、明治憲法の起草過程にはいたのである。

「万世一系」の語は、明治憲法の真の起草者と言われる井上毅が1886年（明治19）末か1887年（明治20）初頭に作成した憲法草案の初稿にすでに明記されている。すなわち、その第1条は「日本帝国ハ万世一系ノ天皇ノ^{シラ}治ス所ナリ」と定めている。これを受けて、1887年8月に伊藤博文が中心となって作成された実質的な第一次草案である夏島草案⁵は、第1条を次のように規定した。「日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」。

明治政府の偉大な法律アドバイザーであった御雇ドイツ人、ヘルマン・ロェスラー（Hermann Roesler, 1834-94）は、夏島草案に対する意見書⁶のなかで、この第1条について次のように述べている。

第一条ニ万世一系ノ天皇云々トアリテ過大ノ誇称タラサランコトヲ欲スルモ、吾人ハ前途百年ヲ予シメト断スル能力ナキヲ奈何セン。言少ク不祥ニ渉ルノ憚ナキニアラスト雖モ、今後幾百千年ノ後マテ皇統ノ連綿タルヘキヤハ何人モ予知シ能ハサル所ナリ。今天下蕃列国ヲ成スモノ決シテ天壤ト共ニ窮リ無キコト能ハサルハ、咸ナ共ニ相通シテ信スル所ニアラスヤ。

つまり、ロェスラーは「万世一系」とは社会心理上の願望の表現に過ぎないと見なし、未来永劫にわたってかくあるべしというような“神学”的規定は憲法に馴染まないと考えたのである。彼によれば、「抑モ日本ガ開闢以来皇統一系ノ天子ヲ戴クハ歴史上ノ事実ニシテ万国其比類ヲ見ス。洵ニ誇ルヘキ事タルヲ以テ、之ヲ憲法ノ明条ニ加フルハ素ヨリ其宜ヲ得タルモノナリ。故ニ寧ロ万世一系ヲ改メテ開闢以来一系ト為サハ、更ニ一層ノ觀美ヲ増スヘシ」とされ、憲法に規定するとしたならば、せいぜい「開闢以来一系」という“歴史的事実”の確認に留めるべきだとされる。「万世一系」のような「唯タ漠然タル文字

5 起草地である神奈川県の孤島の名を取ってそのように言う。

6 大石眞『日本憲法史〔第2版〕』有斐閣、2005年、169-70頁を参照。

ヲ憲法ノ首条ニ置キ以テ天下ノ論難ヲ招クハ万々得策ニアラサルヲ忠告セント欲スルノミ」というのが、ロesslerの見解だった。「万世一系」もまた、法的概念とは異質な“文学”的表現と考えられたのである。

では、このような頼りとしていた助言者からの有力な異論があったにもかかわらず、明治憲法の起草者たちはなぜ「万世一系」の語にこだわったのだろうか。それは彼らが、国際社会の眼など無視して、神がかり的な皇国思想を国体として確立しようとしていたからだろうか。ここで注意を促したいのは、憲法は第4条で次のように規定するのも忘れていないことである。「(天皇の統治権は) 此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」、と。

天皇の統治権の絶対性を宣揚しているかの一方で、その行使には憲法の規制をかける。一見矛盾するような文言である。その思いは、憲法草案を最終的に審議した枢密院での伊藤博文の発言に接した時、いっそう強まる。1888年(明治21)6月18日、憲法草案の審議を開始するにあたって、伊藤は枢密院議長として次のように演説した。つまり、「我国ニ在テ機軸トスヘキハ独リ皇室アルノミ」として、「君権ヲ尊重シテ成ルヘク之ヲ束縛セサランコトヲ勉メタリ」と高唱したのである。⁷ 天皇中心の絶対主義国家を樹立しようとするかの口吻である。

しかし、その一方で、同じ日の会議のなかでは、「憲法ヲ創設シテ政治ヲ施スト云フモノハ君主ノ大権ヲ制規ニ明記シ其ノ幾部分ヲ制限スルモノナリ」とも述べ、「憲法政治ト云ヘハ即チ君主権制限ノ意義ナルコト明ナリ」と断言している。⁸ まさに、明治憲法の相矛盾した規定に帰着するかの伊藤の言説である。これは融通無碍な政治家の御都合主義的な発言に過ぎないのだろうか。それとも、伊藤のなかでは、何らかの形で天皇権力の無制限性と制限性は整合的に考えられていたのだろうか。

まず、現実政治の場で伊藤が理想としたのが、政治的にアクティブな天皇でなかったことは間違いない。彼は、君主の恣意的な意思によって国政が左右されることを忌み嫌っていた。そのことは、憲法制定以前からの、また憲法施行後の彼の政治指導を考え合わせれば、容易に納得できる。坂本一登氏が論じたように、憲法制定以前、伊藤は天皇親政を求める天皇側近の動きを封じ、宮中の制度化を図った。⁹ また伊藤之雄氏が明らかとしたように、憲法の実際の運用において伊藤は、普段は政治への介入を慎むが、議会と政府の対立が袋小路に陥った際には天皇が中立的な立場から調停を行うことを天皇に求めた。¹⁰ 伊藤はそのように、政治に深入りしないが、それと全く没交渉でもない存在として、立憲君主を考えていたと言える。

この点は、いわゆる天皇大権の行使についても指摘することができる。明治憲法は第5条から第16条まで実に広範な天皇の大権規定を定めているが、これらは下からの進言を承認する形で初めて執行された。例えば、内閣総理大臣の任命である。それはまず元老と

7 『枢密院会議事録』第1巻、東京大学出版会、1984年、157頁。

8 同前書、173頁。

9 坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』吉川弘文館、1991年。

10 伊藤之雄『立憲国家の確立と伊藤博文』吉川弘文館、1999年。

いう長老政治家たちの合議で適当な候補者が推薦された。天皇がその推薦者以外の者を総理に任命したことは一度としてなかった。他の閣僚も同様である。内閣のメンバーは首相が推薦した者を天皇が自動的に任命するという慣行が成立していた。

卓越した王権論を著した歴史家エルンスト・カントロヴィチ (Ernst Kantorowicz) は、王の身体とは王その人のみならず彼の助言者たちによっても構成されていたのであり、逆に言えば、王とは「合議体の口」であったこと、「君主は貴族たちとの討議の後に初めて、彼らの助言に基づいて法を「彼が好む」ものとして発布すること、すなわち、王の「好むこと」は、「貴族たちが古来の慣習であると宣言したことが王の権威により発布される」かぎり¹¹で法とされるわけである」、と論じている。そのひそみに倣えば、まさに天皇という身体は助言者たちによっても構成されていたのであり、天皇は「合議体の口」だったのである。

そのような天皇の地位は、Repräsentation と称してよいかもしれない。じじつ、伊藤はそうに天皇を形容していた。次にこの点を考察したい。

3 Repräsentation としての天皇

伊藤は 1899 年 (明治 32) の演説のなかで、次のように語っている。「一国と云ふものは其国土と人民とを、総て一つの風呂敷の中に包んだやうなものである。之を代表、所謂レプレゼント [represent] と云ふ字を使つて居る。是は正しく代表と云ふ字に当るが、私は日本の君主は国家を代表すると言はずして、日本国を表彰する、表はすと云ふ字を使ひたいと思ふ。決して代表ではない」¹²。

ここで伊藤は、天皇は日本国の representation だと述べている。今日でもこの英語の日本語訳としては、自動的に「代表」の語が当てられることが多いが、伊藤によれば、天皇に関して言えばそれは間違いであって、むしろ「表彰」と訳されるべきと説かれている。

確かに、representation (ドイツ語では Repräsentation) は多様な意味合いや歴史的変遷をもった概念である。それを反映して、ドイツでは Hasso Hofmann による有名な研究があるし、『歴史概念史辞典 (*Geschichtliche Grundbegriffe*)』にも独立の項目がある。それらを踏まえて、わが国でも和仁陽氏¹³がそのエポック・メイキングなカール・シュミット研究において、日本人による明治以来のこの概念の理解について反省を促している。

和仁氏によれば、Repräsentation には表現、描写、演出といった語義もあり、理念的なものを可視化するという意味合いを含んだ概念である。

Repräsentation は、それに最もちかいゲルマン語系の対応語をもとめれば「描出

11 エルンスト・H. カントロヴィチ (小林公訳) 『王の二つの身体』上、ちくま学芸文庫、2003 年、213-14 頁。

12 瀧井一博編『伊藤博文演説集』講談社学術文庫、2011 年、169 頁。

13 和仁陽『教会・公法学・国家——初期カール＝シュミットの公法学』東京大学出版会、1990 年。

(Darstellung)」であることから察せられる如く、例えば国法学上の「代表」であると同時に、バロック演劇の「上演」である。何れにしても、この概念の核心には、ペルソーン＝公人＝役柄による何らかのアイデア＝理想像の具体的現出という観念が存在し、従って、公共／公衆／観衆（Öffentlichkeit, Publikum）を前にして行うこと＝公共性（Öffentlichkeit, Publizität）と、それに結びついた（やはり多義的な概念である）可視性（Sichtbarkeit）と密接な関係にある。¹⁴

このような Repräsentation 概念は、カトリック教会と 17 世紀フランスのアンシャンレジームの王政を歴史的範型としていると指摘され、同氏はそのシュミットの憲法学（とユルゲン・ハーバーマスの公共性研究）における訳語として、「再現前」の語を提唱された。理念的なものが装飾されて可視化されるという Repräsentation の含意を汲み取っての訳語である（re- は反復ではなく、強調の接頭辞）。伊藤がどこまでカトリシズムやフランス絶対王政のことを理解していたのかはともかく、representation は「代表」ではなく「表彰」だと喝破した時、彼はこの概念のヨーロッパ史的基層に結果的に迫っていたと言えようか。

シュミットの憲法学は、Repräsentation の概念を駆使して、「カトリシズムとフランスを引照基準とした、市民的かつプロテスタント的なドイツ文化に対するラディカルな批判を内包」¹⁵したものだたと説かれる。では、representation を「表彰」と解釈替えることによって、伊藤はそこにどのような実践的意味を込めようとしたのか。

第一に伊藤が強調しようとしたのは、天皇の対外的表象性だった。そのことは彼が先の引用において、一国が外国と相対した時にはあたかも一個人が相対した時のようでないといけないとして、そのような「一個人」の役割を君主に求めていることから明らかである。

他方で、伊藤の要請する天皇の「表彰」性には、もうひとつの意味合いがあるものと考えられる。それは、まさに「国民統合の象徴」という意味合いで把握することが可能なのではないか。そしてこの点は、先述の枢密院会議開会の伊藤演説の真意を指し示すものである。すなわち、伊藤がそこで強調しなかったことは、天皇が国民統合の象徴であるが故に全能の立法者として法を作り出しその上に立つことができるということであり、逆に言えば、天皇は国民全体によって構成される「body politic = 国家」の一部である限りにおいてそのような主権者たりうるということなのではないか（Rex infra et supra legem「法の下にあると同時に上にある王」）。くだんの演説において、伊藤が欧州のキリスト教に該当する人心帰一の機軸としての役割を皇室に求めていることは、このような見方を裏書きするものであろう。このようにして伊藤は、国家の絶対性を内外に「表彰」しながら、具体的な政治過程のなかでは国家の一機関として振る舞う天皇という身体の二重性を構築

14 和仁・前掲書、171-72 頁。

15 和仁・前掲書、174 頁。

しようとしたものと考えられる。

4 明治憲法第1条のシンボル性

伊藤は表彰としての天皇という考えをどこで学んだのだろうか。管見の限り、伊藤関係の史料のなかで、天皇をそのように定義しているものが1件ある。それは、1882年に憲法調査のためヨーロッパに渡った伊藤が、この年の夏、ウィーン大学教授の国家学者ローレンツ・フォン・シュタインから受けた講義ノートである。

シュタインによれば、国家とはひとつの人格である。人格とは、「良知」= Ich（自我）、「意思」= Wille、「行為」= Tatの三要素を具備したものと説かれる。このうち、国家の意思を形成するのが立法部であり、行為を担うのが行政部とされる。そして、国家のIchたるもの、それが元首たる君主なのである。

良知ハ君主ノ存スル所、即チ我ト云フノ代名詞ヲ以テ邦国ヲ表彰スヘシ。¹⁶

ここでまさに「表彰」の語が使われている。シュタインはさらに次のように、国家学上の君主の位置づけを伊藤に説いていた。

国主ハ一切尊榮諸権ノ長ナリ。尊榮諸権トハ其義常ニ邦国ノ統一ヲ包含スルノ字ナリ。所謂ル国主即チ王室トハ一ノ体制ヲ謂フモノニシテ国王ヲ謂フニ非ラス。是レ王室ナル者ハ邦国統一ノ義ヲ有スト雖トモ、王ハ単ニ一個人ヲ指スニ過キサレハナリ。……王室ト称スルトキハ邦国ノ結構ニ関スル体制ヲ謂ヒ、王ト称スルトキハ其義一個人ニ止マルコトヲ知ルヘシ。故ニ王ハ死物ナリ。王室ハ不老不死ノ物ナリ。¹⁷

ここでは王位が栄爵の源であり、そのような存在として国家の統一を体現する地位であることが指摘されている。そして王位と国王個人とが弁別され、不死なる前者と死去する後者を区別することが教示される。これまで論じてきた「王の二つの身体」、そしてrepresentationとしての王権という考え方を摂取する機会を伊藤は得ていたのである。

明治憲法下の天皇制構築の背景には、カントロヴィチ的な「二つの身体」とシュミットの「再現前」があったと言える。伊藤はこの二つの示唆を受けながら、象徴＝シンボルとしての天皇を概念化しようとしたのではないか、というのが筆者の考えである。

そもそも、当時の日本人にとって、憲法それ自体が多分にシンボリックな意味合いを帯びていた。欧米列強との間に結んでいた不平等条約を改正し、それらと対等の文明国として認知されることを国家的悲願としていた。そのためには、憲法を制定し、国民代表会議

16 「大博士ス丁氏講義筆記」、清水伸『明治憲法制定史』上、原書房、1971年、353頁。

17 前掲「大博士ス丁氏講義筆記」、354頁。

としての議会を開設して立憲国家とならなければならないというのが、明治の政治家の観念であった。憲法は文明国のシンボルだったのである。

ところが、伊藤博文は先述のヨーロッパでの憲法調査で——特に頼みの綱だったドイツにおいて——、憲法制定に否定的な言葉を多々浴びせられることになる。例えば、ベルリンで師事した代表的憲法学者ルドルフ・フォン・グナイストは、伊藤に次のように教示した。

三四日前有名なる学者グナイストなる先生に面晤、其説の端倪を聞得候処、日本の現況を以て見候へば頗る専制論にて、縦令国会を設立するも兵権、会計権等に喙を容させる様にては、忽ち禍乱の媒図たるに不過、最初は甚微弱の者を作るを上策とす云々に御座候。必然一面談位にては、勿論不得了其蘊奥事にて、近日より数々面会我国情をも充分に知らしめ、尚其意見を承候積に御座候。¹⁸

この文面によれば、グナイストは日本が国会を作ったとしても、少なくとも当初は軍備や予算のことには介入させない「甚微弱の者」を設けるのがよいと助言した。それは、伊藤にすら「頗る専制論」と受け取られるものだった。

これは何も、日本の文明度を見下して発せられた言葉ではない。その背景には、当時のドイツ政府が直面していた政治的危機があった。この時ドイツでは煙草の専売化法案が議会にかけられていたが、その審議は紛糾し、さすがの鉄血宰相ビスマルクもさじを投げて雲隠れするという事態に陥っていた。ドイツの識者にしてみれば、自分たちでさえこれほど難儀している議会制度を歴史や文明を異にする日本に移植してみても、成功するはずがないとの親切心があったと解するべきだろう。加えて、ヨーロッパにおいては、1876年にオスマン・トルコで憲法が制定されて議会が開かれたものの、その議会はたちどころに解散され憲法も1年ももたずに停止されたことが、なお記憶に新しかった。

このようななかで、伊藤は憲法の編纂が、西洋の立憲主義の単なる表面的模倣と同視されないように配慮することを余儀なくされる。そのために取られた施策は二つある。ひとつが、憲法と歴史の接合である。明治憲法の起草者たちは、憲法の制定が日本の歴史からの逸脱や跳躍ではなく、その必然的な流れであることを弁証する必要を痛感した。この点は、以下のシュタインの助言がそのことを語って余りある。「日本において憲法を制定するには、必ずその歴史の存在するならん。もしこれと密接の関係ある歴史を添付せざれば、世人は単に土耳其の憲法と同一視するならん」。

続けて彼は、「けだし、歴史はその国の成立、また国民の始祖等を知るがためにはもっとも有益にして不可欠の学科なり」と述べたうえで、「日本の歴史を知らずして、何くんぞ皇室の独立を尊厳とを保つことを得んや」と力説し、¹⁹歴史編纂を国家事業として遂行

18 明治15年5月24日付松方宛伊藤書簡、春畝公追頌会編『伊藤博文伝』中巻、原書房、1970年、271頁。

19 金子堅太郎（大淵和憲校注）『欧米議院制度取調巡回記』信山社出版、2001年、48頁。

することを勧めている。そのようにして、日本憲法の根本は、日本古来の歴史、制度、習慣に基づいたもので、欧米の憲法学の論理によってそれを修飾することが求められた。

もうひとつが、憲法の日本化である。歴史編纂事業や日本史に立脚したコメンタールの作成によって、憲法典の外延を「歴史」化する一方で、当の憲法そのものについてはそこに日本独自の立憲主義を盛り込むという至難の課題が屹立していた。

憲法典の劈頭第1章に「天皇」の規定が置かれ、その天皇は万世一系の神話的存在であり、統治権の総攬者だとされたことには、まさにそのような対外的に標榜された日本型立憲主義の宣言という一面があったと考えることができる。

明治憲法は、国民代表原理としての議会制と君主主義原理としての天皇制との調和を図ったものとして成立した。それだけならば、この憲法は19世紀型立憲君主制の範型に行儀よく納まるものでしかない。しかし、明治憲法に特徴的なのは、後者の天皇制という要素が表面上議会制を包摂していることであろう。冒頭に天皇の規定が置かれ、そこに神権の要素すら付与され（“文学”的第1条!）、万能的主権者性が高唱されて広範な天皇大権が定められる（第5条～第16条）。

注目に値するのが、このような専制主義的このうえないように見受けられる憲法が、制定当初、欧米の専門家には好意的に評されたことである。1889年（明治22）7月、明治憲法の起草に関与した金子堅太郎が、憲法の英訳を携え欧米を巡回した。金子は伊藤博文の名代として、行く先々で公布されたばかりの憲法についてコメントを求めた。いくつか摘記しよう。²⁰

イギリスの著名な憲法学者アルバート・ダイシーは、日本がドイツ憲法に倣ったとして、次のように述べている。「独逸の皇帝ほど権力の強大なる帝王は、他に比類稀なるものとす。けだし、君主政体を永く維持せんと欲せば、帝王の大権をして強大ならしめざるを得ず。英国の君主政体は、英国に特有にして、他国において容易にこれを模倣するを得ざるものなり」。

「法の支配」を理論化したダイシーだったが、ここでは彼は明治憲法が君主権の強化を図ったことを称揚している。哲学者シジウィックなどはダイシーよりもさらに進んで、そのようなイギリス流議会政治を排斥して言う。「立憲君主政体が、英吉利に存するが如き議会政治に推移するの傾向を防制する」ことを、と。

このように、深い学殖を誇る識者は、明治憲法の実天皇制原理をむしろ称賛した。それは、極東の島国の立憲事業に対する無関心に由来するリップ・サーヴィスというよりも、欧州の地における議会政治が当時明らかに曲がり角に来ていたことを反映しているだろう。有権者の大衆化という事態の進展は、議会制が拠って立つ同質性を切り崩し、階級対立による議会政治の瓦解という危機が萌していた。グナイスト、シュタインのようなドイツ系の学者が格別に、ダイシーやシジウィックといったイギリス系の学者もがこぞって、日本憲法の実天皇制原理を言祝いだひとつの理由は、そのような時代的背景にあったのである。

20 金子・前掲書。

以上のことを考えに入れば、第1条の「万世一系」とは、天皇を神格化して国民を馴致させるという国内的意味以前に、国家統一の「表彰」としての対外的象徴性の意義が看過されてはならないと思われる。そのことは、憲法の英訳を師のシュタインに届けた送り状で伊藤が記した次の一節を読む時、いっそう実感されるのである。

伊藤は言う。「あなたが看取されるであろうように、天皇陛下によって最終的に裁可され、いまあなたの御高覧に供されているこの憲法は、いかなる点においても、どこか他の国の憲法の単なる模写なのではありません。お気づきになられるであろうように、わが憲法はその根本原理において、全く日本的なもの（entirely Japanese）なのです」²¹。

5 明治憲法の実際

最後に、明治憲法の施行後、実際どのように天皇制は実践されたのか見ておきたい。便宜上、ここでは日清戦争での天皇の働きを取り上げる。それは、天皇が立憲君主として、また大元帥として国の内外にその存在を示した好個な事例と考えられるからである。²²

1894年（明治27）8月2日、日本は清国に対して宣戦布告した。これは天皇にとって本意でない開戦だった。開戦の奉告を皇祖皇宗に行う勅使の人選を求められた時、天皇は最初、「其の儀に及ばず、今回の戦争は朕素より不本意なり、閣臣等戦争の已むべからざるを奏するに依り、之れを許したるのみ、之れを神宮及び先帝陵に奉告するは朕甚だ苦しむ」と言い放って拒絶の姿勢を示した。²³

このように天皇が内心では戦争を潔しとしなかったことは確かである。だが、いったん開戦となるや、天皇はそのような個人の意思をじきに封印して、日本軍を率いる大元帥としての役割を見事に演じていく。そもそも開戦に先立つこの年の3月、天皇皇后の大婚25周年を祝う銀婚の式典が国を挙げて催された。伊藤博文の建議になるとされるこの祝典は、西洋に倣って皇室の大衆の人気を喚起し、当時の議会政治の惨状によっては望みえなかった国民の一体感の作出を狙ったものと考えられる。宮中の慶事に国民も熱狂し、「市中は軒頭に提燈を掲げ、意匠を凝したる飾物を作り、深更に至るまで花火を打揚げて祝意を表す」と『明治天皇紀』は記している。²⁴このような国家統合のアイコンとしての立憲君主像と並んで、いまや日清戦争の開始により大元帥たる天皇というこれまでの伝統とは無縁な、もうひとつの天皇のイメージが確立していくことになるのである。

9月8日、戦争の最高司令部たる大本営を広島に移すこととされ、13日、天皇は皇居を出発して同地へ向かった。沿道や立ち寄った地で歓呼する民衆が迎えるなか、15日、厳

21 1889年3月1日付シュタイン宛伊藤書簡、Japanischer Nachlaß Lorenz von Steins, Landesbibliothek Kiel, 4. 2. 04. 21-8。

22 国家的表象としての天皇が行った儀礼外交の例としては、大津事件の際の天皇の皇太子ニコライやロシア皇帝への主体的な慰問外交が挙げられる。

23 宮内庁編『明治天皇紀』第8、吉川弘文館、1973年、481-82頁。

24 前掲『明治天皇紀』、390頁。

かに広島に到着した。

大本営は、広島城内の第五師団司令部の木造2階建ての建物を借り受けた。階上正面の24坪の部屋が天皇の御座所となり、ここで天皇はすべての執務のみならず食事・就寝など一切の生活を行った。部屋の模様は、東京から持ち運んだ机椅子を除いては特別の家具もなく、夜寝る時にその机と椅子を運び出し、代わりに寝台が入れられた。側近の者が安楽椅子や暖炉を備えることを申し入れても、「戦地に斯くの如きものや有ると宣ひて允したまはず」だったという²⁵。また、長期の滞在に合わせて御座所の増築を勧めても、「朕の不便の故を以て増築を図るは朕の志にあらず、出征将卒の労苦を思はば不便何かあらんと」と述べて、これまた諾としなかったという²⁶。遊行することもなく、目の前の広島城天守閣に昇って景色を愛でることさえ憚った。広島滞在の最終期まで女官を従わせず、皇居では女官にさせていた爪切りなども自らした。

以上のような節制を極めた生活を率先して行うことにより、天皇は戦時下における君主としての役割を十二分に果たしたと言ってよい。それは、自らを律して耐乏に堪え、戦地の兵と心をひとつにして国民を鼓舞するというシμβリック的機能である。大元帥というポストにあるからといって、天皇が具体的に作戦指導を行ったわけではないし、そもそもそのようなことは期待されなかった。求められていたのは、人心を帰一させる拠り所としての象徴的働きだったのである。これは平時にあっても言えることである。明治憲法の規定では確かに天皇が統治権を総攬するとして親政が謳われているように見えるが、その実際においては、天皇は政治に日常関わることは避け、議会と政府の対立が修復困難と考えられた場合にのみ、両者の調停者として振る舞ったのである。そのようにして立憲体制のもとで国民的宥和をシンボライズすることこそ立憲君主としての明治天皇の役割であり、自ら実践してきたことであった。大元帥としても、天皇はそうのように身を処したのである。

1895年（明治28）5月30日、天皇は東京に還幸した。「大元帥」明治天皇の“凱旋”に国民は歓喜した。日比谷通りに巨大な凱旋門が建立されたほか、ここかしこに奉祝のアーチが設けられた。昼過ぎに天皇を乗せた御料列車が到着し、そこから皇居までの約30分の道のりはまさに凱旋パレードと化した。奉迎する民衆に応えるために開放した馬車が特別にあつらえられ、沿道には天皇を一目見ようとする人々が殺到した。ここかしこで君が代が奏され、「万歳」の声が挙がった。当時の有力紙『時事新報』は、「我国開闢以来未曾有の盛典」²⁷と記している。天皇を国民統合のシンボルとする作業は、前年の銀婚の祝典に始まり、日清戦争を経てこの凱旋式に至ったことで完結したのだと言える。それはまた、「国民」の誕生²⁸を意味するものでもあった。

そのような喧噪の裏で、当の睦仁その人は何を考えていたのだろうか。勤儉に徹していた広島大本営の生活だったが、睦仁はしばしば廊下で蹴鞠に興じた。維新後登用された侍

25 前掲『明治天皇紀』、512頁。

26 同上。

27 『時事新報』1895年5月31日付、3頁。

28 佐谷真木人『日清戦争』講談社現代新書、2009年。

従や侍従武官はその作法を心得ていない者が多かったが、そのような者たちに自ら伝授したという。ある日、武官の蹴った鞠が玉体に当たり、その武官は恐懼した。だが、睦仁は「海軍が水雷を発射せり」と述べて微笑んだ。²⁹ 厳肅な君主の姿を務める一方で、彼の胸中には維新前の宮中生活への郷愁があったのだろうか。

東京に環幸する前、睦仁は京都に滞在した。1895年4月に下関条約が調印されたのを受けて、大本営は広島から京の地に移され、睦仁も行幸したのである。この“里帰り”を睦仁は心から喜んだ。御所の隅々を愛で、二条離宮の楼上からの眺望を楽しみ、先帝たちの陵に詣でた。京都滞在は1カ月に及んだ。5月27日に東京への“凱旋”が決定された後も、睦仁はその地を去るに忍び難く、「征清大総督以下出征軍の凱旋計画未だ確立せざるに先だちて還幸せんこと然るべからず」と抵抗した。³⁰ それは、立憲君主としての役割を弁え、それに徹底して同化することを本分とした人が、束の間見せた真情だったのだろうか。王の二つの身体を誰よりも心得、時に自らの意思を押し殺しながら明治憲法下でのその確立に精魂傾けていたのは、明治天皇その人だったと言える。

29 前掲『明治天皇紀』、608-09頁。

30 『明治天皇紀』825頁。